

琉球大学教育学部附属小学校 第15代校長  
千原初等教育研究会 会長

**石川 博久** いしかわ ひろひさ

令和6年度より本校校長に就任。教職34年目。公立小学校教諭、附属小学校教諭、県教育庁那覇教育事務所指導主事、公立小学校教頭、浦添市教育委員会学校教育課指導監、公立小学校2校の校長経験を生かし、学校経営を推進している。

# 日々の実践を互いに問い よりよい授業をつくる

## 『教育機関誌』で紡ぐ 先輩教師の教育への思いを

実践のすべてを吟味検討  
よい点は保管し  
さらによりよい実践は共有する

今から三十七年前。本校が創立して六年目を迎えた頃、先生方の中から「自分たちが取り組んでいる授業実践を記録に残し、互いの日々の授業改善につなげ、子供たちの学びをさらに豊かにしていこう」という声があがり、その思いから千原初等教育研究会が発足したと先輩方からお聞きしています。

当時は、現在のように先進的な授業実践を直接参観したり、その授業実践の資料をネット等から収集することは容易ではなかった時代でしたので、本研究会が作成・発刊した『教育機関誌』は、本校のみならず、沖縄県の教育においても、大変貴重な資料だったことでしょう。

その『教育機関誌』第一号が校長室の棚にあります。機関誌第一号は、いつもその棚の側に座って業務を行っている私を見守り、「校長として先生方と子供たちが共に学び合ひ、やりがいをもって生活できるように

にしっかり取り組んでください」と言っているようです。そのページをめくると、本校第二代校長である阿波根直誠先生の機関誌創刊への思いが、タイトル「すべてを吟味検討せよ・・・児童の眼の高さまで下りて」として次のようにまとめられています。

「これまでの校内研究に対する本校教官の強い意気込みと、その反面『研究紀要』のみでは一寸おさまらないエキスともいふべき一証左とも言えよう。折角の成果がそのまま埋もれてしまつては何とも勿体ないことである。したがって、叙述の形式はどうであれ、本校教官そしてこれに賛同する教師が、お互いの日頃の生々しい実践教育体験をふまえ、この開かれた機関誌に気楽に寄稿し問うことの意味は極めて大きい。」と述べている。そして、教育者ペスタロッチ著『白鳥の歌』より引用し「すべてを吟味検討せよ。よい点はこれを保存し、またもし皆さん自身のうちにか一層よい考えが熟してきたら、私が本書

で真実と愛とをもつて皆さんに与えようと試みたものに、真実と愛をもつて付け加えていただきたい」と。自己の実践におごらぬ謙虚な探究心をもち、よりよい実践を積み重ねていくことの大切さを述べています。

## 「学び続ける」が「自ら変わり続ける営み」であってほしい

さらに阿波根校長は、「副題の「子供の学び」に迫る姿勢もまさしく授業研究の過程で教官の間から異口同音に発せられるようになった言葉が反映し適切だと思う。かつて、哲学者モンテーニュは、子供の力に応ずるためにどこまで自分が下りていかねばならないかを判断することの大切さを教師に訴えたが、たしかに児童の眼の高さまで下りることの容易ではないことは言うまでもない。しかし、教師は地道にこれに挑み、下りねばならないのである。ペスタロッチやフレーベルをはじめ、偉大な先人も、実はその創見の多くを子供から学んだと言っても

過言ではないとしている。」と述べています。

つまり、教師は子供に寄り添い、子供の学び・成長を常に考えながら、学び続けなければならぬのです。教職経験を積み、ベテランになっても、常に謙虚な姿勢で、子供にとってよりよい学びを探究するということです。

私が教諭の頃の経験を振り返ると、自分のやりたいことにチャレンジし、新しい授業スタイルを提案すること必死で、他者からの助言や考えに耳を傾けず、自身の考えに固執していました。謙虚さに欠けていたと思います。

ここでいう「学び続ける」とは、ただ単に我武者羅に走り続けるということではありません。たとえ一人前になり、ある程度自身の指導に自信がもてたとしても、これまで通り全力で走り続けるのではなく、途中、立ち止まって、他者の考えを聞きながら自身の走ってきた腕の振り方や足の運び方等を見つめ直し、改善しないといけない部分は、新たな方法も取り入れ

ながら、走り続けるといふことです。「学び続ける」が「自ら変わり続ける営み」であってほしいのです。

これからも急速に変化する社会における学校現場においては、自身が教師として十年間、二十年間取り組んできた指導方法が、通用しないこともあると思います。いや、すでにそういう状況になっているのかもしれない。私たちは、そのような状況を想定した上で、子供に向き合わなければならぬのです。うまくできていたことも含めて、これまでの指導方法に固執することなく、「よりよい授業の組み立て方」や「教師の説明を子供の問いに変えるにはどうすればいいのか」「どのよう多様な考えを比較させるのか」「思考を整理し思考を促す板書の仕方」「ICT機器の効果的な活用にはどのような方法があるか」「どの教科と教科等を関連させると学びが広がるか」等、客観的に自身の指導方法を子供の姿から見つめ直すのです。そのためには、授業実践後の自分自身や教

師間で行う振り返りが批判的になりフレキシションでなければなりません。そこでの助言や指摘されたことを謙虚に受け止め、吟味検討するのです。

そういう意味では、先輩教師がまとめた『教育機関誌』は、教師の指導の工夫や失敗談を語り合いながら、日々の実践を互いに問い、よりよい授業をつくる貴重な資料・財産と言えます。

そこで、これまで一年間かけて冊子にしてきた『教育機関誌』を、今年度より、毎月、二・三の実践を学校ホームページに本校の教育実践として日常的に掲載し、広く公立学校の先生方に発信していきたいと考えております。勿論、一年後には、これまで同様、一年間学校ホームページで発信してきた実践を冊子にし、十一月の公開研究発表会時に全ての参加者に配布したいと考えております。

沖縄県教育委員会を始め、各地区・各市町村の行政機関の皆様や、公立学校の先生方に、本校のよりよい実践を提議できるよう全力で取り組んで参ります。どうぞよろしく、お願いいたします。

図1 千原初等教育研究会 機関誌 第1号 表紙

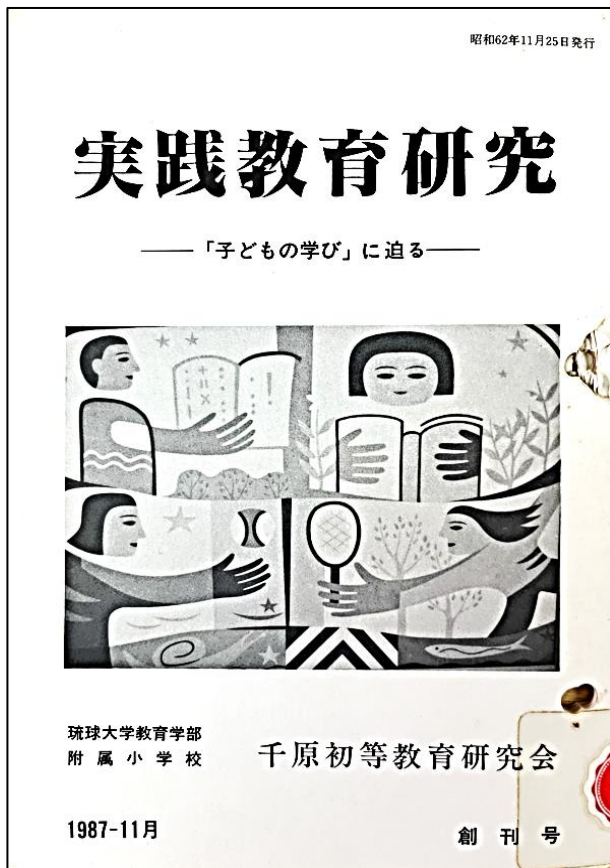


図1は、先に紹介した本校『教育機関誌』第1号です。表紙の絵は、琉球大学教授の稲嶺成祚先生が本校校舎に描いた壁画です。子供たちの学びに向かう姿と大きな手が印象的です。学校教育目標の目指す子供の姿の通り、子供一人一人の夢や目標を、教師と子供が共に学び合いながら、自分自身の手でつかみ取るようとしているようです。また、図2の目次には、「実践」私の学級経営ノートから「子ども再発見」と記載され、研究紀要には、枚数制限で掲載できな

かった日常の授業実践例や学級経営のアイデア等が多く紹介する内容になっています。改めて、本校創立当初から、子供たちや後輩教師のために日々授業実践を積み重ねてくださった先輩教師の皆様に感謝申し上げます。結びに、多くの先生方が、昔と今も変わらない「不易」の教育と、新しいスタイルの「流行」の教育、そして、先輩教師の教育への思いをこの『教育機関誌』を通して紡ぎ、互いの実践に生かし、教師のやりがいにもつなげることができれば幸いです。

図2 千原初等教育研究会 機関誌 第1号 目次

実践教育研究	
—「子どもの学び」に迫る—	
目次	
創刊号 十一月	
● 創刊によせて	阿波根直誠 1
● 提言 「経験レベル」から「思考レベル」へ	仲地 重夫 4
<b>実践</b>	
● 私にとっての子どもの発見(1)	西江 重勝 6
● 課題の工夫 — 教科書の課題を生かして —	大石 英助 16
● 音楽科が増えるもの	玉城 正茂 20
● 低学年の学習活動で思うこと	国仲富美男 24
● 基本的な絵の具の扱いに慣れ、色に関心をもちたせる指導	富山 利通 28
● 道徳指導と特別活動の統合の試み — 大主題「めあて」を軸とした指導から	金城 信弘 32
<b>私の学級経営ノートから</b>	
● 小さな読書指導と絵話し、ストホの白馬への取り組み	伊江 淑美 42
● 兎と子どもたち	玉村 弥堅 48
<b>子ども再発見</b>	
● 「先生、これでは納得できません」	田港 朝勝 52
● 子どもの事実学ぶ	宮城 茂雄 54
● うし、うま遊び — 一年の体育授業から —	仲西 起實 56
あとがき	表紙 仲村 善郎 口絵写真 仲西 起實 目次カセット
表紙の絵について	この絵は、本校開校時に、琉球大学教授稲嶺成祚先生から贈られた壁画の複製です。その絵の一部を参考にさせていただきました。